

上ノ国でハロウィンイベント開催



10月29日、本町で初となるハロウィンイベントが開催され、様々な衣装に身を包んだ約250名の子どもたちや親御さんがパレードを行いました。
ハロウィンとは、秋の収穫を祝い、悪霊などを追い出す意味合いのある行事ですが、現代ではアメリカなどでカボチャの中身をくりぬいて作る「ジャック・オー・ランタン」を飾ったり、子どもたちが魔女やお化けに仮装して近くの家を訪れてお菓子をもらったりする形式が定着しています。
パレードでは、子どもたちが可愛らしいお化けや魔女に変身し、なかにはドラえもんになる子もいるなど、バリエーションに富んだ衣装が披露され、町内を練り歩きました。
そして、イベントに協賛しているお店の前では、子どもたちがハロウィンの合言葉「トリックオアトリート」を唱え、笑顔でお菓子を貰う姿が印象的で、上ノ国初のハロウィンイベントは、パレードの最後まで大いに賑わいながら幕を閉じました。

東京都大田区に「ひやま」を紹介



11月4日から5日にかけて、檜山管内の7町が東京都大田区のイベント「OTAふれあいフェスタ」に出展し、会場に溢れる多くの来場者へ「北海道のひやま」をPRしました。
檜山管内7町は、昨年からのイベントに参加しており、今年も各町が連携して特産品を持ち込んだ物産販売を展開し、本町からは「アワビ（酒蒸し）」を出品し、「奥尻ワイン」や「乙部町産ホタテ（焼き）」も好評を博したほか、江差追分民謡まつりのコーナーでは、江差追分全国大会優勝者である厚沢部町出身の杉本武志さんが、5曲を披露するとともに、曲の合間に檜山のPRを行いました。
2回目の参加となった今年は、来場者の方から「去年も来てたよね?」「蒲田でも特産品を売ってたよね?」といった声も聞かれ、少しづつではありますが、「北海道のひやま」が認知されつつあるように感じます。

まちを見つめる、高校生の視点



11月17日、上ノ国高校の生徒が学生の視点から町政への質問や提案を行う「ふるさと高校生議会」が開催され、2年生36名が参加しました。
議会で質問された内容は、「少子高齢化対策」「廃校舎等の」施設の利活用」「路線バス」「子育て施策」「産業の活性化」など多岐にわたり、高校生の目に浮かんだまちへの疑問や提案が議場で飛び交いました。
議長を務めた碓海斗君に議会の感想を伺うと、「私は議事進行役でしたが、質問内容は、特に人口減少による様々な問題をどうすれば解決できるかをクラスの皆と考えました。」と話し、高校生の目線から「上ノ国をよりよくするために何ができるか」という真剣な思いが伝わるふるさと高校生議会でした。

上ノ国に新たな特産品を



11月12日、特産品や商品開発の糸口を探るべく、全国的に大きな実績を残しているバイヤーの方を招いた講演会がジョイじよぐらにて開催され、170名が参加しました。
講師となった「内田勝規」氏は、東武百貨店の北海道物産展で物産売上日本一（13億円）を達成するなど数々の実績を持ち、同じく講師の「天野洋海」氏はその内田氏のアドバイスを受けながら、新ひだか町で料理店「あま屋」を経営し、地域の特産品を活かした新料理を開発・提供して国内外から好評を博しています。
講演会では、内田氏が上ノ国町の素材を用い、地域の「匂い」となる商品を生み出すべきだという販売戦略が語られ、また、天野氏からは、「SNSを通じた情報発信」の影響力が、想像以上に重要性を増していることなどが、成功の秘訣として語られました。
また、午後からは新たな特産品開発を目的とした個別相談会も行われ、町内外より参加した5社が、両講師から様々な意見を提示され、新商品開発に繋がる糸口を手にすることができたとのことでした。